

山崎 和代 ◯やまさき かずよ
 社会福祉法人西宮市社会福祉事業団
 訪問看護課 課長
 西宮市訪問看護センター 管理者
 認定看護管理者

西宮市訪問看護センター(兵庫県西宮市)は3カ所のサテライト事業を展開するステーション。山崎和代さんに、管理者としての日々の思い・考えを語っていただきます。

9

災害時に慌てない準備

前回、コロナ禍での当センターにおける訪問看護について述べました。今回は、前回書ききれなかったことをお伝えします。

コロナ禍では、地震等の災害と同様にBCPに基づいたトリアージを実施し、軽症者・状態安定者・重症者に分けて訪問看護を提供しました。これを円滑に進められたのは、日ごろの訪問看護でセルフケアの獲得に向けた支援に取り組んでいることと、限りある資源を有効に活用する意識が定着しつつあることが大きかったと思います。

◆阪神淡路大震災の経験

筆者がセルフケアの重要性を認識したきっかけは、1995年に起きた阪神淡路大震災です。その年はまだ訪問看護師1年目。先が見通せない状況の中での訪問看護を経験し、災害が発生すると、訪問したくてもできない状況が起り得るのだと痛感しました。それ以降、利用者・家族が災害時にも安心して自宅で過ごすことができるよう、セルフケアの獲得支援をめざすようになりました。

実際には、初回訪問時にアセスメントや利用者・家族の意向を踏まえて、セルフケアの目標を設定するとともに、訪問看護卒業の目安を伝えています。しかし、利用者の中には「セルフケアは大変」「看護師が来ると安心だからずっと来てほしい」と考える人も少なくありません。そのため、利用者

にセルフケアの重要性を理解してもらう必要があります。そこで訪問看護師に求

められるのが、アセスメント力やコミュニケーション能力です。訪問看護師が「ケアをする」ことだけがよい結果を生むのではなく、利用者や家族のできることを増やしていく。これが安心な在宅療養につながります。このようなセルフケアの獲得支援は、訪問看護師の腕の見せどころではないでしょうか。

◆限られた資源を有効活用

ケアマネジャーから「状態観察としばらくの間は入浴介助を行ってほしい」と依頼された退院間もない利用者に対し、ADLが回復、あるいは通所サービスの利用を始めても、入浴介助を続けるスタッフがいます。そうしたスタッフには「限られた訪問看護の資源を、必要な人に、必要な時間を提供するよう意識してほしい」と伝えています。

災害時に事業所が被災したら、訪問看護ステーションは通常の機能を早期に取り戻すことが求められます。この場合、優先順位の高い業務から進めていくため、日ごろからそれを意識して行動することが重要だと考えます。

*

コロナ禍の訪問看護をとおして、平時から非常事態に備えて準備をしておくことの重要性を再認識しました。災害などの事態に遭遇したとき、できる限り早く支援体制を整えられるように、これからも備えを怠らないようにしていきます。



illustration TOKUDOME